

『三四郎』とレオナルド・ダ・ヴィンチ

Junko Higasa 2014.6.15

『虞美人草』で、漱石は、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」を藤尾の母の様相に描いた。そのレオナルド・ダ・ヴィンチは『三四郎』に二度登場する。一度目は東京へ向かう列車の中の男一広田先生が直接口にしたその名前である。二度目は、野々宮さんと美禰子の間に交わされる「空中飛行器」の話である。

広田先生が『レオナルド・ダ・ヴィンチと云う人は桃の幹に砒石^{ひせき}を注射してね、その実へも毒が回るものだろうか、どうだろうか」と云う試験をした事がある』と言っているように、レオナルド・ダ・ヴィンチという人は、興味の対象に出逢うと、画を途中でやめてすぐその対象に没頭する人であった。実際描きかけの画の多くは、弟子によって仕上げられた。そして彼の興味は、平面・立体の美術作品ではなく、科学・医学・工学へと向かった。その中に現代の自転車や飛行機の原型と言えるべきものがあり、その詳細な設計図は、今でも目にすることが出来る。そのように彼の才能は、美を表現する絵画や彫刻よりも、実利的な科学で完成を見ることが多かった。

野々宮さんが語る「空中飛行器」とは、レオナルド・ダ・ヴィンチのハングライダーを含む飛行機のことだろう。それを漱石は総括して「飛行器」という文字に表したのだろう。漱石は相当、レオナルド・ダ・ヴィンチに興味を持っていたようである。